

# 1920年代農民運動における 教育活動（上）

日本農民組合香川県連合会を事例として

横関 至

---

はじめに

- 1 日農香川県連における教育活動の位置づけ
- 2 1923 - 25年の夏季講座（以上、本号）
- 3 支部での教育活動と青年訓練所への対処
- 4 常設農民学校の設立
- 5 日農県連解体後の動向－香川県立農事講習所の設置

おわりに

はじめに

本稿の課題は、1920年代農民運動像の検証の一環として、運動先進地香川県における教育活動の実態を分析することである。

1920年代の社会運動のなかで日本農民組合（以下、「日農」と略記）は、社会運動の統一の要に位置していた<sup>(1)</sup>。その日農の活動の先進地の1つが、香川県であった<sup>(2)</sup>。日農のなかで全国第1位の組織数を有していた日農香川県連（以下、「県連」と略記）は、小作争議のみでなく選挙・議会活動に早い時期から着目しており、労農党の有力な支持基盤として1927年普選第1回県議選では労農党県議を4名誕生させた。この議席数は、農村部での無産政党の県議の当選数としては最多であった。そして、普選第1回総選挙では、選挙干渉の集中の下でも、労農党は「堅固な支持」を獲得した<sup>(3)</sup>。こうした活動はどのような教育活動によって支えられていたのかを検討していくこととする。

1つの県を対象として分析する理由は、一県を単位として展開されている地方政治・政党・運動

---

(1) 拙稿「1920年代中葉における日農の政治闘争論」(『一橋論叢』97巻2号, 1987年2月)参照。

(2) 拙稿「1920年代後半の日農・労農党」(『歴史学研究』479号, 1980年4月)参照。

(3) 注2拙稿参照。

組織・選挙の結節点としての位置を県が占めていたからである<sup>(4)</sup>。

対象時期は、1923年の県連結成から、県連解体後の1929年の香川県立農事講習所設立までの時期である。

分析の前提として、3つの事柄を確認しておこう。まず、公教育における格差の存在についてである。1918年の香川県告示第246号所収の数値(「尋常小学校卒業生上級学校入学状況」)によると、尋常小学校卒業生12481名のうち、高等小学校に5784名、中学校に1090名の入学であった(『香川県史』6巻367頁)。さらに、この数字には表れていないが、家が貧困であるために小学校を卒業できないままに働きに出る子供達も存在していた。知識欲を満たす上で大きな格差があったことが、確認されねばならない。

次に、農民の情報源についてである。農民と新聞との関わりについては、1926年時点での状況についての宮井(射場)清香の回想が参考となる。「農民も知識欲がさかんで、いまだきいたことのない自分たちの利益になる話なので、何ヶ村もの農民が、遠くは弁当もちでつめかける盛況をみせていた。そのころの農村では、商業新聞をとっている家は、かぞえるほどしかなかったから、演説会は学問の場であった」(宮井(射場)清香『黎明の光にむかって』ひかり書店、1996年、35頁)。なお、新聞の発行部数が判明するのは、1927年11月の数値である。日刊紙は地元発行の新聞だけであり、『香川新報』が6248部、『四国民報』が6424部であった。他に、「旬刊」として、『大阪朝日新聞 高松号外』が7000部、『大阪毎日新聞 讃岐号外』が7000部であった(内務省警保局『新聞雑誌社特秘調査』1927年。復刻版、大正出版、1979年、638頁)。農村地域で何部購入されていたのかは、不詳である。ラジオは、1925年6月の大阪中央放送局の設置により、聴取可能となった。加入者数は、1925年末で102名、1927年3月に321名、1928年3月で673名であった(香川県師範学校・香川県女子師範学校『香川県総合郷土研究』1939年。復刻版、名著出版、1978年、761頁。ただし、依拠資料は不明である)。農民がラジオから情報を得ることは極めて難しかったと推定される。このように、農民が新聞・ラジオから情報を得る機会は極めて限られていたとみて、大過なからう。

第3に、県の1921年の調査による「民衆娯楽」の実状をみると、農民の娯楽は次のようなものであった。「最も広く行はるる娯楽の名称」は、「都会地」では活動写真、芝居、浪花節、囲碁、義太夫、謡曲、野球等であり、「地方」では村芝居、盆踊、草角力、浪花節、活動写真、義太夫等であった。「職業の種類より見たるもの」という項目の「農業者階級」では、浪花節、将棋、芝居、活動写真、盆踊があげられていた(「民衆娯楽調査」1921年調、『香川県社会教育施設概要』1922年、香川県庁所蔵。『香川県史』第6巻、通史編 近代2、507-510頁)。これをみる限り、農民の知識欲を満足させる条件が乏しかったことが推測される。こうした農村において演説会・教育講座等が開設された場合には、知識を求める農民が参集するであろうと推定しても間違いでなからう。

「演説会は学問の場であった」との宮井清香の言葉は、大袈裟な表現ではなかったであろう。

従来の研究においては、以下のような問題点があった。1つは、組織・思想・教育についての研

(4) 拙稿「1920年代後半における地方政治と農民運動」(『大原社会問題研究所雑誌』367号、1989年6月)参照。

究の遅れがあり、政治闘争、教育活動も含めて農民運動の全体像を明らかにする事が等閑視されてきた。「農民運動＝小作争議」論という把握から、主体分析それ自身の弱さがあった。主体分析を行ったばあいにも、出身階層分析に主眼が置かれたという偏りがあった。さらには、栗原百寿氏、庄司俊作氏の経済要求達成後は眠り込むとの把握や「階級闘争」概念の外部からの持ち込みという玉真之介氏の見解の影響も強く残っている<sup>(5)</sup>。また、従来の研究においては、県連組織についての検討はほとんど無く、支部や「部落」段階での分析に重点が置かれていた。具体的分析によって、普選下の農民運動像を再検討することが求められている。

2つは、社会主義と農民の関係についての西田美昭氏の近年の議論は、選挙における無産政党への支持から、農民の社会主義支持という結論を導き出されている。選挙結果から社会主義支持という判断を下すことの問題点については、既に指摘したところである<sup>(6)</sup>。本稿では、教育活動の内容を検討することによって、社会主義と農民の関係を検証していくこととする。

3つめは、農民組合の教育活動に関する研究についてである。新潟県の木崎農民学校の研究は、多い。しかし、県連の活動全体のなかでの位置づけが充分検討されていなかったり、他の活動との関連を追求する視点の弱さがあった<sup>(7)</sup>。香川県の事例については、山本繁氏の著書や『香川県史』は、日農香川県連の教育活動に言及している<sup>(8)</sup>。ただ、そこにおいても、青年訓練所への対応や「軍事教育反対」という問題が検討されていないために教育における対抗軸が不明確である点や、日農解体後の動向に言及していないために「皇道」主義を掲げる教育との関連が問われていない。

4つめは、香川県農民運動における教育活動についての前川正一の議論（『左翼農民運動組織論』白揚社、1931年）の検証である。前川は全農の組織問題の権威とみなされていた人物であり、香川県の運動の指導者であった人物である。よく引用される文献であり、これで当該時期の運動が説明される場合もある。前川の議論の再検討が必要な所以である。前川曰く、「そもそも香川の組織は困難が割合に少なく、××も割合に少なかったため、殆ど春風をあびて平安の大道に馬を駆るが如く順調に進んだ。大衆は××を知らなかった」（同上、118頁）と。更に言う。「そうした順調な闘争と発展は、生々しき事実を捉えて政治的暴露を行ひ確りした政治意識を大衆それ自身のものとする事が少なかった。所謂、闘争を通じての訓練、鮮明な階級意識の把握も充分に行はれなかった。勿論、文書による教育、座談会、研究会、農民学校も無いではなかったが大衆の規模に於いてそれが成し遂げられず、頭の中だけは、相当に理屈を蔵ひ込んでおろが、闘争は実践は、それは別だ、と云ふ理論と実践との弁証法的統一と云ふ奴が欠けていたことは事実として認められだ<ざ>るを得ない」（同上、118 - 119頁）と。この評価には、異議がある。前川は、伏石事件・金蔵

---

(5) 拙稿「1920年代農民運動史研究の評価基軸」（『大原社会問題研究所雑誌453号、1996年8月）参照。

(6) 前掲拙稿「1920年代農民運動史研究の評価基軸」（『大原社会問題研究所雑誌』453号、1996年8月）及び拙稿「書評 西田美昭著『近代日本農民運動史研究』」（『大原社会問題研究所雑誌』466号、1997年9月）参照。

(7) 拙稿「木崎争議と現代」（豊栄市解放運動戦士顕彰会編集・発行『木崎争議70周年記念集会記録集』1993年所収）参照。

(8) 山本繁『大正デモクラシーと香川の農民運動』（青磁社、1988年、141 - 142頁）、同『香川農民運動の研究』（かもがわ出版、1997年、30 - 34頁）及び『香川県史』6巻（1988年、294 - 298頁）。

寺事件・土器事件に言及しておらず、1926年9月27日の事前検挙の問題にも触れず、選挙干渉や三・一五事件にも言及していない。これらに触れることなしに「順調に進んだ」と評価するのは、運動実態に即した把握ではない<sup>(9)</sup>。教育講座は「大衆的規模」のものではなかったとする評価については、事実を踏まえたものであったかどうかが具体的に検討されねばならない。

## 1 日農香川県連における教育活動の位置づけ

1923年6月、県連が結成された<sup>(10)</sup>。県連は当初より教育活動を重視してきた。1923年7月3日、東讃連合会の「香川県農民組合幹部会」が50名の参加で開かれた。そこでの議題の1つとして、「農民スクール開設の件」が検討され、日時の決定と「講師其他は万事本部の御斡旋を願ひます。」ということが決定された(『土地と自由』19号、1923年7月25日、復刻版『土地と自由』法政大学出版局、1巻219頁 - 以下、単に巻数のみ記す)。

1923年8月1日から5日にかけて、県連初の夏期農民学校が開催された。綾歌郡坂本村の農民会館と木田郡平井町の花園座の2カ所において、各5日間の日程であった。受講者は「毎日各々4百人乃至6百人」で、昼に講演、夜には「科外講演として各支部への巡回講演」が行われた(『土地と自由』20号、1923年8月25日、1巻231頁)。

1923年9月1日、2日には、日農組合長の杉山元治郎の講演会が綾歌郡で開かれた。1日午後1時より綾歌郡川津支部で講演会があり、「夜は婦人のために特別の講演をした」。翌日は午前10時より綾歌郡富熊支部の発会式が開かれ、「前川、安藤、行政、杉山の順序で話」し、富熊支部での話の「終わった人から第2会場たる法敷寺支部の講演会に臨」んだ。この綾歌郡法敷寺支部の講演会終了後、「午後7時高松出帆の汽船にて帰路に就」いた。「坂出町に来て初めて東京の大震災を知った」(「本部日誌抄」、『土地と自由』22号、1923年10月25日、1巻257頁)。

1923年10月6日、「綾歌郡坂本村支部長大林熊太及び支部員大林千太郎」を「主催者」とする日本農民組合香川県西讃連合会発会式が綾歌郡川津村字六反地説教場で行われた。参加者は74名であった。役員選挙で、会長藤本金助・副会長鶴田森次・理事大林熊太外5名、顧問林庄吉外1名が選出された。決議事項のなかで注目すべきものは、以下の項である。

「1、県会議員選挙批判演説会を必要と認むる箇所にて行ふこと」

「1、政治運動に関しては将来各種議員選挙に当り組合員中より適任者を定め団結運動をなすこと」

「1、小作法改正に関しては小作法案を作り連合会を経て立法院に請願すること、但し立案は役員に於て作成し来るべき議会に委員を設け上京せしめ請願運動をなすこと」

「1、各組合支部より2名宛を選定し雄弁会を組織し宣伝に努むること」

「1、育英会を組織すること」

(9) 注2 拙稿参照。

(10) 県連結成過程については、拙稿「香川農民運動の基礎過程」(『大原社会問題研究所雑誌』405号、1992年8月)を参照されたい。

「1, 小作組合間に専任医師を囑託すること」

「1, 小作組合内に共同販売店を設けること」

「1, 村内各種役員は役員の改選期を見計らひ農民側が掌握すべく遂行すること」

( 協調会農村課『農村事情に関する調査』1924年6月14日, 35 - 37頁 )

ここからは、育英会、医療、共同販売等の小作料以外の幅広い問題にも取り組もうとしていること、各種選挙や小作立法等の政治問題に関与しようとする姿勢があったことが判明する。教育活動との関連では、雄弁会を組織しての宣伝活動や育英会の設置が注目される。

1924年3月には、県連主催の大講演会が開催された。2日は高松市大和座、3月3日は木田郡井戸村大黒座、綾歌郡坂本村坂本支部倶楽部でひらかれた。司会者は「香川県支部連合会長 前川正一」で、講師は「日本農民組合(顧問)理事賀川豊彦, 主事行政長蔵, 顧問弁護士吉田賢一, 関東同盟本部員三宅正一, 山梨県連合会長林実, 福岡県連合会長阿部乙吉, 香川県連合会長前川正一, 連合会会計係松野庫太, 連合会井戸支部長川窪庄太, 日本労働学院講師加藤宗平」であった( 協調会農村課『農村事情に関する調査』1924年6月14日, 113 - 115頁 )。「時恰も大阪市に開催せられたる第3回全国農民大会直後に当りしを以て、日本農民組合本部の賀川豊彦, 行政長蔵其他全国大会出席の為め来阪せる各有力団体の代表者数名来県し氣勢大いに昂り, 相当注目を惹けり」( 同上 )。聴衆は、3月2日は「約1500 - 1600名」、3月3日は「約1500 - 1600名」であった。なお、3月3日の数値が2カ所の合計か否かは、不明である。講演の要旨は「各講演者共殆ど同じく」するものであり、現状を批判し改革を求める訴えがなされた。「要は我国小作人都市労働者等の『プロレタリア』階級の生活状態の悲惨なる実状を述べ、資本主義経済組織の悪弊を叫び、斯くの如き社会に於て階級闘争を演ずるは誠に忌むべき現象なるも、亦翻つて考ふれば、現時都市に於て労働争議起り農村に於て小作争議頻発するは時代の趨勢としてやむを得ざるものなり。然れども之が解決は合理合法に行はるべきものにして、吾々小作人は組合の力に依り全国的に運動を為し最終の目標に到達せざるべからずと結ぶ」( 同上 ) と。

この大講演会の講師を務めた県連会長の前川正一は、次のような農民運動像を有していた人物であった。それは、日農全国大会についての感想において示されたものである。「我々は思想団体でもない、政治団体でも無論ない。経済運動の団体である。それは戦ふことに依って醒めゆき、強くなる実際運動であり『耕す者の手に土地を』『農村を生産者だけで満さう』そうして全無産者が提携して解放運動の陣頭から我等の新しい働く者の王国建設へ! の運動であって、それは理論の遊戯では出来ない。実際運動と農民の心裡とに根ざし始めて完成される運動だと信じている」( 前川正一「先が遠い モット努力しやう」『土地と自由』27号, 1924年3月25日, 2巻5頁) と。ここに見られる如く、前川は「我等の新しい働く者の王国建設へ! の運動」を提唱しつつも、それを「理論の遊戯では出来ない」ものであり、「戦ふことに依って醒めゆき、強くなる実際運動」とみなしていた。こうした認識を持つ指導者の下で、教育活動が展開されていったのである。

1924年9月10日から16日まで、農民講座夏期大学が開催された。場所は大川郡長尾町の西蓮寺、香川郡大野村、仲多度郡琴平町の金陵座の3カ所で、各5日間( 9月10 - 14日, 11 - 15日, 12 - 16日 ) 行われた。聴講料は、「組合員 金50銭, 組合員以外 金1円, 会員制度」であった(『土地と自由』34号, 1924年10月8日, 2巻37頁)。このうち、仲多度郡琴平町で開催された講座の聴講

券発売数は「1018枚」で、「5日間の延人員実に4千人の多きに達した」(「仲多度郡から(2)」、『土地と自由』34号, 1924年10月8日, 2巻37頁。なお、この記事では「秋期大講座」と書かれている)。

1925年2月20日、日農香川県連の第2回大会が香川郡鷺田村浪花倉庫において開催された。出席者は「代議員117名傍聴者約450名」であった。大会宣言は、農民組合の性格について、「抑も農民組合の運動は単なる小作料の問題に止まるべきものに非らずして全日本小作人階級の解放、真の農業経済制度の樹立に在る事云ふまでもない」と規定した。そして、「政治闘争」の必要性を説いた。「今や我が日本農民組合はその戦線を経済的範囲より更に政治的範囲に拡大せんとするの重大なる時期に際会している吾等は此の秋に当って政治的進出を躊躇して我等の獲得し得べきものを逸してはならぬ」(日農香川県連出版部発行『会報』1号, 大原社研所蔵)と。「11 代議員会議事」では、農民教育機関についての提案があった。「リ 農民教育機関 争議の勝利による利益は之れを積み立てて、巡回文庫、巡回講話等の費用に当て、以て農村子弟の教育を盛ならしむる事」と。注目すべきは、争議勝利を「農村子弟の教育」に結びつけようとの発想が示されていたことである<sup>(11)</sup>。さらに、香川県連合会提出の「12 全国大会提出議案の件」のなかに、「D 農民教育機関設置の件」と「E 軍事教育反対の件」が含まれていた(協調会農村課『農村事情に関する調査第3輯』1925年7月, 47-49頁)。

1925年2月28日の日農全国大会において、香川県連の大林千太郎は県連大会の決定に基づいて「農民教育に関する件」の提案理由を説明した。そこでは、農民組合が教育活動に取り組む理由が、簡潔に述べられている。「現在の教育制度に於ては金力さえあれば小学校、中学校、高校、大学と誠に好都合の様に見えるが、我々無産者に於ては小学校位が関の山で直ちに、田園に出て奴隷的生活を続けているにすぎぬ(拍手)此に於て現在の学府の門戸は工場農園に働くものは、この恩恵に与り得ない、都会に於ては、労働学校があつて便宜だが、私達は何らのものも持たない。今や軍事教育は実行されんとしつつあるが、我々は断じてこの軍国主義に反対しなければならない。今、大正9年に於ける我らの学校は、43820の多きに達しているが、その中、理想に近いものは少しもない。我々は、この農民教育を実行しなければならぬ、貧乏なるが故に知識に遠ざからねばならぬと云ふ事は我々の忍び能はざる所である。我々は、この具体的方法として印刷物を作るとか、巡回文庫を作るとか、支部に於て毎年1人の有為なる青年を選び、中央に送り、将来に於ける指導者を作る様にしたいと思ふから特別委員会を組織して慎重審議されたい」と(『土地と自由』39号, 1925年3月27日, 2巻59頁)。ここでは、教育活動の原点が「貧乏なるが故に知識に遠ざからねばならぬと云ふ事は我々の忍び能はざる所である」という表現で示されたことが注目される。それと

(11) 日農香川県連出版部発行『会報』では「農民教育機関設置(春夏秋の農民講座、各支部に巡回文庫設置印刷物配布)」と書くだけである(日農香川県連出版部発行『会報』1号, 大原社研所蔵)。争議勝利を「農村子弟の教育」に結びつけようとの発想について触れていない。さらに、『土地と自由』においても、その発想に言及せず、「無産階級の自覚」や「階級的指導精神」から説明されている。即ち、「農民教育機関設置の件(提案理由)無産階級の自覚を促すと共に階級的指導精神の普及、宣伝を計る」(『土地と自由』46号, 1925年10月8日, 2巻95頁)と。何故言及されていないのかは、今後の検討課題である。

ともに、「軍国主義」反対が唱えられていることも注目される。ただ、何を「軍事教育」とみているのかは、不詳である。次に、軍事教育反対の緊急動議を安松九一が提案した。安松は「軍事教育反対の委員を作って決議文を大臣に送ること」を提案した（『土地と自由』39号、1925年3月27日、2巻59頁）。これについては、「安松君の動議の件を農民教育委員に一任しては如何です」とされ、「異議なし」となった（同上）。大会3日目の3月1日、農民教育に関する委員の指名が行われた。これは、香川県連（大林千太郎）の提案を具体化したものである。「城戸亀雄、大林千太郎、貝原猛、小林嘉次郎、下中伊三郎、清宮芳雄、永井信義、大西俊夫、山神種一、藤崎常吉以上10名」が選出された（『土地と自由』39号、1925年3月27日、2巻59頁）。このうち、香川県連関係者は、大林千太郎と山神種一であった。

ここで、大林千太郎・安松九一・山神種一の県連での位置やその出自について一瞥しておこう。大林千太郎は、日農支部を県下で最も早い時期に結成した人物である。来県していた杉山元治郎を木田郡平井町の演説会場に訪ね「ぜひ1日帰阪を延期して坂本村で演説会をやってくれ、案内のためわたしが迎えに来たのだ」と杉山を説き、その演説会を契機に日農支部を結成した（杉山元治郎伝刊行会『土地と自由のために 杉山元治郎伝』1965年、220 - 221頁）。1925年5月の時点で、県連の教育部長であった（「日本農民組合香川県連合会 情報」第1号、1925年5月。大原社研所蔵）。翌年には、県連の4人の常任執行委員のうちの1人となっている（日本農民組合香川県連合会調査情報部「調査報告書」第2号、1926年6月。大原社研所蔵）。大林は「7 - 8反耕作」の小作農民であった（栗原百寿『香川農民運動史の構造的な研究』農民教育協会農民運動史研究会、1955年、291頁。耕作面積は、宮井進一と山神種一からの聞き取りに依拠している）。1泊した杉山元治郎の印象では、その家は「小さいかにも小作人の家らしい家」であり、その家の風呂は壺風呂であった。「やがて湯に入れというので案内されるままに行くと、野天に突立っている壺風呂である。しかもその壺は少し斜めになっている。少し横になると倒れそうな気がするが、勇気を鼓して中に入った」（前掲『土地と自由のために 杉山元治郎伝』221 - 222頁）。このような小作農民出身の県連生え抜きの幹部である大林千太郎によって、教育活動に就いての提案がなされたのである。安松九一は、1925年5月の時点で、県連の副会長であった（「日本農民組合香川県連合会 情報」第1号、1925年5月。大原社研所蔵）。翌年には、県連の常任執行委員長となっている（日本農民組合香川県連合会調査情報部「調査報告書」第2号、1926年6月。大原社研所蔵）。安松も県連結成当時から指導者である。山神種一は、日農香川県連仲多度郡連合会の主事であった。この後、1925年11月の金蔵寺事件で検挙された。1926年6月には、県連の書記として、宮井進一とともに琴平出張所に駐在していた（前掲、日本農民組合香川県連合会調査情報部「調査報告書」第2号）。1926年5月7日の金蔵寺事件での山神種一の尋問調書によれば、山神の学歴は「尋常小学校ヲ卒業シタノミ」で、卒業後は「自宅ニ在ツテ農業ニ従事」していた（前掲、山本繁『大正デモクラシーと香川の農民運動』77頁）。妻と子供2人で、両親が「豆腐製造及煙草小売店ヲ営ミ」、妹が「他人ノ田地8反歩程ヲ両親等ト共ニ小作シテ居リマス」という家庭であり、山神自身は「農民運動ニ携ハリ今日テハ農業ニ致シマセヌ」という状態であった（同上、93頁）。このように、大林千太郎・安松九一・山神種一という在地の農民運動家が、教育活動の重要性を日農全国大会で提案し、日農の教育活動を担う委員に選出されたのである。

1925年5月17日から20日にかけて、日農県連、各郡連合会主催の婦人部組織促進講演会が大川郡1ヶ所、香川郡2ヶ所、綾歌郡2ヶ所、仲多度郡2ヶ所で開催された。聴講者は「延3028人」で、「其内婦人は延人員780人」であった。講師は、高橋富江、山上きみ江と綾歌郡連合会婦人部の大林カン、大林ち江のであった(『土地と自由』43号、1925年7月5日、2巻77頁)。

1925年5月30日、6月1日には、春季農民講座が木田郡平井町、綾歌郡飯野村、同郡岡田村、仲多度郡高篠村、三豊郡観音寺町の5ヶ所で開催された。稲村隆一を講師として、「資本主義と農村問題、農家経済と小作制度、無産政党と農民問題」という演題で行われ、参加者は「各所共約400人」であった(『土地と自由』43号、1925年7月5日、2巻77頁)。

次いで、1925年8月21日から8月28日まで、夏季農民講座が開かれた。県下8ヶ所で、各3日間行われ、参加者の「延人員概算」は「7050」人であった(『土地と自由』46号、1925年10月8日、2巻95頁)<sup>(12)</sup>。さらに、科外講座としての講演会が岡田、川西、国分、江尻、坂本、川島の各村で開かれた(同上)。

1925年10月1日には、婦人部講演会が香川郡由佐村大字吉光の神庵で行われた。由佐、大野、川岡、池ノ内、川東の「各支部員計二百四五十名」が参加した。日農総本部への報告(「香川郡由佐村大字吉光支部日誌」、日農総本部に宛てたもの、大原社研所蔵)の「備考(結果若シクハ感想)」欄には、「前川正一君ノ宣伝及重井田尻両婦人ノ御講演ニ大イニ感激ス今後組合ノ道ニ奮闘ス」と記入されている<sup>(13)</sup>。

こうした教育活動においては、推薦図書が指定された。1925年5月の時点での青年部推薦図書は、次のような書物であった(『土地と自由』43号、1925年7月5日、2巻77頁)。

「山川均・田所輝明訳『プロレタリア経済学』	
山川均著	『資本主義のからくり』
堺利彦訳	『唯物史観解説』
河上肇著	『唯物史観研究』
高橋亀吉著	『日本主義(ママ)経済学の研究』

(12) 山本氏は「1925年(大正14年)の夏季大学受講生は、7050人(聴講料50銭、組合員以外1円)であった」(山本繁『大正デモクラシーと香川の農民運動』青磁社、1988年、142頁)とされている。また、近年の著書でも、山本氏は「最盛期には参加者が7千人を超え」とされている(山本繁『香川農民運動の研究』かもがわ出版、1997年、30頁)。しかし、「延人員」であることを明記しなければ、参加実態を正確に把握することはできない。「延」かどうかは、大きな違いである。なお、山本氏の両書とも数値の依拠資料は明示されていない。

(13) この「重井田尻両婦人」は、日農岡山県連の「重井しげ子」と「田尻岡代」のことであろうか。近代日本社会運動史人物大事典編集委員会『近代日本社会運動史人物大事典』(日外アソシエーツ、1997年)によれば、「重井しげ子」は1904年に岡山県藤田村の小作人の娘として生まれた。1921年より藤田農場争議を見聞し、1922年重井鹿治と結婚して、北海道で演劇活動を展開した。1924年、岡山に帰る。1925年2月藤田男爵への陳情行動に生後6ヶ月の長男を背負って参加。同年2月15日、大阪中之島公会堂での演説会で子供を背負って演壇に立ち、藤田争議支援を説いた。1925年秋より山上喜美恵、田尻岡代とともに「女権獲得運動のため」県内を巡回講演した。



そして、1925年8月の『夏季農民講座講義概要』（日農香川県連『夏季農民講座講義概要』県連出版部、1925年8月、大原社研所蔵）に「参考までに割合に価格の安い手頃の読み物を左に紹介する」として示されたのは、以下の文献であった。

著訳者	書名	発行所	価格
行政長蔵著	『百姓は何故貧乏するか』	農民組合	10銭
杉山元治郎著	『農民組合の理論と実際』	科学思想普及会	70銭
稲村隆一著	『田園文明の建設』	フェビアン協会	20銭
北原龍雄著	『常識の社会主義』		
山川均著	『資本主義のからくり』	青年運動社	30銭
堺利彦著	『社会主義大意』	無産社	10銭
山川・田所訳	『プロレタリア経済学』	科学思想普及会	70銭
堺利彦訳	『唯物史観研究』	白揚社	2円
堺利彦訳	『空想より科学へ』	白揚社	1円50銭
高橋亀吉著	『日本資本主義の研究』	白揚社	2円
赤松克麿著	『経済学12講』	白揚社	2円80銭
堺利彦著	『労働と資本』	無産社	10銭
堺利彦著	『利潤の出处』	無産社	10銭
河上肇著	『唯物史観略解』		10銭

このように、1925年時点における推薦図書は、杉山・行政・稲村ら日農の指導者と堺利彦・山川均ら社会主義者の文献が中心であった。

ところで、教育活動を推進していた県連の指導的幹部の学習への意欲は強いものであった。県連会長の前川正一の伏石事件時の姿について、平野市太郎は次のように回想している。「私が始めて彼を知ったのは伏石事件前で事件中はずっと彼と行動を共にしていたが、その間特に印象づけられた事は彼が非常な努力家であったという点である。暇を見つけては読書にふける彼の姿には頭の下がる思ひがしたものである。獄中では夜など私が暴れると看守が来て『前川を見ろおそくまでおとなしく読書をしているぞ』と説教されたものであった。」（「同志前川をしのびて」四国民芸館発行『前川正一追悼誌』讃岐叢書第2巻8月号、1949年、35頁）と。さらに、農民運動の指導的幹部のなかには、家が貧困であるために小学校を卒業できないままに働きに出ると言う教育環境のなかで育った人物がいた。綾歌郡坂本村生まれで県連発足当初より幹部であり伏石事件・土器事件で検挙された大林熊太や、大川郡松尾村生まれで女性幹部として活動した宮井清香（旧姓・射場）が、そうであった。彼らの学びたいという欲求は、強いものであった。大林について、宮井清香（旧姓・射場）はつぎのように回想している。「大林同志はとても勉強家であった。彼は日本農民組合香川県連の事務所で、炊事当番をしているときでも、片手に本を持っていた。若手の書記にまじって、ずっと年長のおっさんが、もくもくと読書している姿は崇高でさえあった。大林同志は学校へ行っていないかった。私との会話の中で、ちらともらした生いたちによれば、彼は貧農の子で学校へも行かず、牛飼いや奉公にやられて少年時代をすごしたそうである。そして青年時代は神戸で沖仲士をしてもらしたが、そのころはバクチなどもうったという」（「大林熊太同志の思い出」、羽原正一

『香川農民運動秘史 - 香川が生んだ闘士大林熊太君とそのころ』1975年、私家版、53 - 54頁)。こうした大林熊太の学習について、夫の宮井進一から聞いた話として、次のように述べている。「宮井からきいたところでは、彼は自分で『いろは』から勉強して文盲を克服し、ひと一倍読書力と理論を身につけたとのことである」(54頁)と。そして自分自身のことについて、宮井清香は以下の如く回想している。「わたしは小学校2年のころから、学校を休んで、あちこちと臨時やといの子守にいった」りしており、「学校は休んでも、教科書さえ読んでおればおくれることはない、ひとりでも勉強もした」が結局「小学校も卒業せずに神戸へ年季奉公にでた」(前掲『黎明の光にむかって - 夫・宮井進一とともに』22 - 23頁)。ここで、「貧乏なるが故に知識に遠ざからねばならぬと云ふ事は我々の忍び能はざる所である」という1925年2月28日の日農全国大会での大林千太郎の発言が想起されなければならない。大林熊太・宮井清香の知識欲・学習意欲は、この大林千太郎の発言を裏付けるものであった。こうした強い知識欲をもった幹部によって教育活動が展開されたのである。

## 2 1923 - 25年の夏季講座

ここでは、県連主催の1923年夏季農民学校・1924年農民講座夏季大学・1925年夏季農民講座を比較検討しておこう。

まず、聴講数をみてみよう。1923年の夏季農民学校は、綾歌郡坂本村の農人会館と木田郡平井町の花園座の2カ所において、各5日間の日程で開催され、受講者は「毎日各々4百人乃至6百人」であった(『土地と自由』20号、1923年8月25日、1巻231頁)。1924年農民講座夏季大学は、9月に大川郡長尾町の西蓮寺、香川郡大野村、仲多度郡琴平町の金陵座の3カ所で開かれ、仲多度郡琴平町で開催された講座の聴講券発売数は、「1018枚」で、「5日間の延人員実に4千人の多きに達した」(「仲多度郡から(2)」、『土地と自由』34号、1924年10月8日、2巻37頁。なおこの記事では、「秋期大講座」と書かれている)。1925年夏季農民講座は、県下8カ所で、各3日間行われ、参加者の「延人数概算」は「7050」人であった(『土地と自由』46号、1925年10月8日、2巻95頁)。8カ所とは琴弾劇場、仲多度郡琴平町の金陵座、世界館、府中小学校、香川郡鷺田村の浪花座、花園座、三豊郡観音寺町の松寿閣、養専寺であった<sup>(14)</sup>。この聴講者の数値をみるならば、大規模な教育講座であったといっても大過なからう。

次に、講師・演題を示した第1表 - 第3表を素材として検討していこう。

(14) 会場の所在地については、「民衆娯楽調査」(1921年調査、『香川県社会教育施設概要』1922年、香川県庁所蔵。『香川県史』第12巻、資料編近代・現代史料2、513 - 515頁)に依拠した。『香川県史』第6巻(通史編 近代2、296頁)は、「琴弾劇場(観音寺町)」、「養専寺(富田村)」としている。

第1表 1923年夏季農民学校の講師と演題

講師	演題
杉山元治郎	「農村問題」
小岩井浄	「社会問題」
細迫兼光	「思想問題」
吉田賢一	「農村法律問題」
山名義鶴	「労働問題」
行政長蔵	「農民の歴史」
藪下吟次郎	「法律問題」
山岡	「農村経営改革問題」

- 備考 1 講師名は、『土地と自由』1923年7月25日、1巻216 - 217頁及び1923年8月25日、1巻231頁。  
 2 杉山元治郎と行政長蔵の名は、日農香川県連の『夏季農民講座講義概要』（県連出版部、1925年8月、大原社研蔵）には記載されていない。

第2表 1924年9月の農民講座夏期大学の講師と演題

講師	演題
杉山元治郎	「土地の本質，歴史及び政策」（「土地と農民の歴史」）
小岩井浄	「町村制より国政へ」（「自治制」）
大西俊夫	「資本主義制度下における農民の地位」（「資本主義と農民」）
山本宣治	「社会の生物学的考察」（「生物学」）
細迫兼光	「組合運動論」（「組合運動論」）
吉田賢一	「農民組合の法律問題」（「農村法律問題」）

- 備考 1 講師名は、『土地と自由』33号、1924年9月5日、2巻31頁34号及び1924年10月8日、2巻37頁。  
 2 演題のうち、( )内は、前掲『夏季農民講座講義概要』に書かれているものである。

第3表 1925年8月の夏期農民講座の講師と演題

講師	演題
金井満	「消費組合論」
川俣清音	「百姓一揆の話」
中村義明	「労働運動の一般的情勢」
園部真一	「政治行動の本質」
浅沼稻次郎	「無産階級の政治行動」
杉山元治郎	「小作料の話」

- 備考 1 講師名は、『土地と自由』46号、1925年10月8日、2巻95頁。  
 2 前掲『夏季農民講座講義概要』では、講師名・演題が異なっている。『夏季農民講座講義概要』は、川俣清音「百姓一揆の話」ではなく、谷口善太郎「労働運動史」となっている。

まず、講演者をみると、小作料・農民の歴史・土地政策等については、日農幹部が担当していた。杉山元治郎が3回、行政長蔵・大西俊夫・川俣清音が各1回であった。労働運動・労働問題については、山名義鶴、細迫兼光、中村義明が各1回担当している。「思想問題」・「社会問題」等については、小岩井浄・細迫兼光・山本宣治が、法律については吉田賢一が2回、藪下吟次郎が1回講義している。政治問題については、小岩井浄・園部真一・浅沼稻次郎が、農業経営については山岡が、消費組合論については金井満が担当していた。講師を務めていたのは、日農幹部・労働運動指導者と小岩井浄・細迫兼光・山本宣治らの「左翼」知識人であったことが判明する。

次に、この3回の講座を講演題目の主題別・年次別に分類すると第4表ようになる。

第4表 講演題目の主題別・年次別分類

	1923年	1924年	1925年	計
小作料・農民の歴史・土地政策	2	2	2	6
労働運動・労働問題	1	1	1	3
法律	2	1	0	3
政治	0	1	2	3
「社会問題」・「思想問題」等	2	1	0	3
農業経営	1	0	0	1
消費組合論	0	0	1	1
計	8	6	6	20

備考 第1表 - 第3表を集計した数値である。

ここには、いくつかの注目点がある。まず、小作料・農民の歴史・土地政策に関するものが20講座のうち6講座と最も多かったことである。次に、年毎の変化をみると、3年続けておこなわれたものは、小作料・農民の歴史・土地政策に関するものと、労働運動・労働問題に関するものであった。法律と「社会問題」・「思想問題」は1925年にはなくなり、反対に1923年にはなかった政治に関するものが増加している。単年度のみであったのは、農業経営（1923年のみ）と消費組合論（1925年のみ）であった。第3に、この講義においては、天皇制・軍隊・民族問題・差別問題等は演題として採用されていなかった。

講義内容については、1925年夏季農民講座の3つの講義（金井満・浅沼稻次郎・杉山元治郎）の概要だけが、判明している。前掲『夏季農民講座講義概要』に収録されているのである。概要といっても、項目が羅列されているだけのものであり、講義の内容が判るものではない。しかし、その内容を窺い知る貴重な資料であることは、間違いない。

まず、金井満の「消費組合論」の項目は以下の如くである。

- 「1 諸国に於ける消費組合発達史 英国 - 独逸 - 仏蘭西
- 2 消費組合とは如何なる組織のものであるか
- 3 消費組合は如何なる目的を以っているか
- 4 消費組合と社会主義との関係如何
- 5 卸売組合と其の生産的活動

- 6 消費組合内部の労働問題及び労働組合
- 7 吾国に於ける消費組合の現状
- 8 産業組合が民衆生活に及ぼせる影響」

「参考書」として、以下の書物が挙げられている。ウェブ『消費組合運動』大原社研発行・ウェブ夫人『消費組合発達史論』大原社研発行・中央会編『産業組合講義』産業組合中央会発行・中央会編『産業組合教科書』産業組合中央会発行等。

ここでは、社会主義について「消費組合と社会主義との関係如何」という項目で言及していたことが、注目される。

次に、浅沼稻次郎の「無産階級の政治行動」は以下の如くである。

- 「1 経済行動と政治行動
  - 2 政治運動の意義
    - 新政治運動
    - 旧政治運動
  - 3 無産政党
    - 1, 無産政党の性質
      - 1, 階級的
      - 1, 大衆的
      - 1, 議会万能か利用か
    - 2, 組織形態
      - 個人単位
      - 団体単位
    - 3, 運動形態 - 団体中心」

ここでは、「議会万能か利用か」という問題が取り上げられていること、社会主義に言及している項目がないことが注目される。

3つめは、杉山元治郎の「小作料の話」である。

- 「1, 小作の起源
  - 1, 小作料の性質
    - 1, 小作料の種類
 

1 賦役小作料	2 分益小作料	3 見取小作料
4 分益定額小作料	5 現物小作料	6 金納小作料
7 混合小作料	8 滑尺式小作料	
    - 1, 英国に於ける小作料決定法
      - 1, 理論地代と實際地代
        - 1, 標準小作料
 

1 還元標準小作料	2 温情標準小作料	3 理論標準小作料
4 合資標準小作料	5 収益按定小作料	
  - 1, 小作料の支払方式
    - 1, 定額小作料の長短
    - 2, 歩合小作料の長短
    - 3, 実物制度の利害
    - 4, 金納制度の利害」

ここでは、小作料の分類が中心となっていた。この概要から見る限り、地主制度に直接に言及する箇所は設定されていないし、社会主義との関連で論じている項目も存在しない。なお、この項目のうち「小作料の種類」は1924年10月の地方小作官講習会での沢村康九州帝国大学教授の講演(「小作料に関する理論」, 農林省農務局編纂『地方小作官講習会講演集』帝国農会発行, 1925年9月刊。復刻『地方小作官会議録』第1分冊, 御茶の水書房, 1980年, 所収)と類似していた。

この3つの講義概要に共通しているのは、現状分析の基礎知識を提供しようとしていたことである。

このように、1923年から25年までの講座においては、日農幹部と「左翼」知識人を講師として、農業のみでなく、労働・政治・法律等の各分野の問題を題材とした広範囲な演題が用意されており、現状分析の基礎知識が提供されようとしていた。社会主義については、1925年の消費組合論で言及されているが、それ自体を正面から論じる演題は用意されていなかった。そして、この講座においては、天皇制・軍隊・民族問題等は演題として採用されていなかった。

(よこぜき・いたる 法政大学大原社会問題研究所兼任研究員)

●佐藤進一  
【新版】古文書学入門  
初版以来四半世紀にわたって、全国の大学・研究者の支持を得て三十三刷を数えた佐藤持得の古文書学。近年の成果をふまえた改訂・増補をまねた。待望の新刊！ 二九〇〇円

●岩本由輝・國方敬司編  
家と共同体 日欧比較の視点から  
家と共同体というキーワードによって近代以前の経済的営みを読み解き、人と経済的な点から問い直す。二七〇〇円

●A・O・ハーシュマン／岩崎稔訳  
反動のレトリック  
進歩・改革に対する反対論の論拠を基本的なテーゼに分類してそのレトリックの同型性を暴き、党派的思考の不毛性を浮彫りにする。二八〇〇円

●M・セール／高尾謙史訳  
ローマ 定礎の書  
ローマという都市の定礎に潜む暴力を掘り起こし、人類が暴力の支配から脱出して安んずる道を探る。四七〇〇円

●M・セール／米山親能訳  
彫像 定礎の書  
至る悠久の時間から太古にまで人間の文明の根源と進行しつてをさぐる知的冒険とその定礎マニフェスト。三八〇〇円

●R・フレッチャー／林邦夫訳  
エル・シッド  
イスラム諸国を相手にレコンキスタとされる中世イスパニアの英雄エル・シッドの伝説的実像に迫る。三八〇〇円

●粕谷信次編  
東アジア工業化  
その論理と諸相、光と影を追って日本と東アジアの比較研究に迫る。二八〇〇円

●金子征史編著  
労働条件をめぐる現代的課題  
雇用環境をとりまく近年の社会的・経済的状況と労働者概念を再検討する。法政大学現代会研究所叢書16。三〇〇〇円

**法政大学出版局**

〒162 東京都新宿区市谷田町2-14-1  
☎03-5228-6271 振替00160-6-95814  
本広告の表示価格は消費税抜きです